

夢を手がかりに、人の心の底を理解しようとした心理の専門家は多い。フロイトの精神分析理論もその一つだ。芸術作品も夢に似る。詩は万葉集の昔から夢を扱ってきた。作家の村上春樹も、夢と現実の間を行きつ、戻りつしながら、人生の危機と向き合う作風で支持される。

村上が「風の歌を聴け」（1979年）でデビューしたころ、作詞家の松本隆も夢を詞にし始める。原田真二の「キヤンデー」（77年）、「TIME TRAVEL」（78年）（タイム・トラベル）（78年）だ。思春期の不安定さは無意識の願望と、その抑圧となって現れていた。

原田はニューミュージック系の先駆的存在で、類いまれな音楽才能の持ち主だった。そのため、過去3曲は原田の作曲が先で、松本が後で詞を付ける流れだった。だが「タイム・トラベル」は詞が先で、松本の発想を濃厚に反映できた。

「夢の中では時間と空間を飛びまくる。こんな設定の歌はそれまでなかった。一度、

松本隆の原風景

第3部 男性アイドルとの挑戦



5 美学



原田真二の「タイム・トラベル」(フオーライフミュージック提供)

歌のSFのようなものをつくってみたいかった」

夢の旅はエジプトの砂漠へ、ニューヨークへと場所を移す。登場人物もクレオパトラの衣裳を身につけたり、マシンガンを撃つたりと破天荒で、おもちゃ箱をひっくり返したよう。最後は東京に戻ってくる。

夢の中で、主人公の男性は好きな女性を世界中にエスコートする。恋が成就するのか

明と暗、現実と夢が交錯

原田真二

時間と空間を飛びまくる「タイム・トラベル」

どうかは分からない。想像の場面が次々と変化する歌詞は、2人の結末を、歌を聞く人に委ねる。

女性アイドルに向けた作品には、好きな男性の気持ちを理解しようとする姿が描かれ、ここでは「失恋」の裏にある願望を強く印象づける。男女の心が通じ合うのが簡単ではないことを示唆した。

「自分の心と闘う。人はそらやって成長していくと思う。特に男はね。青春ってそんな時代じゃないかな」

松本は原田のデビュー曲から続けて4作品を担当した。現実的な失恋の物語を「いいんすぶる」「す」「シャド」「ボクサー」（いずれも77年）、夢の言葉をつづられる「キヤンデー」、「タイム・トラベル」と交互に生み出した。

そこには思春期の男性の明暗が現れている。現実と夢が交錯するスタイルは村上春樹の小説のようだ。

「かっこいいだけの成功物語は現実から乖離し過ぎていて、裏にある影を描いてこそリアルだ」

松本は男の美学をそう語り、映画の影響があったと明かす。前のシエームス・ティーンではなく今度は黒沢明の「七人の侍」（54年）を挙げた。

農民を守り、野武士と戦う勇敢な侍志望の三船敏郎だ。後に「世界のミフネ」と呼ばれる彼もまた若手で、泥の中ののたうち回っていた。

「三船さんほどの大スターでもかっこ悪い役をこなした時期があった。だからこそ感じる深みがある。画面があつてこそ、本当の男の姿だと思ふ」

それは、男性の真の姿に迫る新たな作風との出会いでもあった。

（敬称略）
〓おわり〓
（津谷治英）

2020.
12.31
神戸新聞分

2020年12月には多くの昭和歌謡界の巨星が墜ちました。たかが一語の拘りに一曲の運命を左右させる。言葉の重み大切がたくさん隠れている。その響きに美しさを感じ心を豊かにされていたのかなあと思いを馳せさせていただきました。